

Patrick D. Wall 著
Ronald Melzack

Textbook of Pain

檀 健二郎 (福岡大学麻酔科)

世界疼痛学会雑誌ペインの編集主幹であり、ロンドン大学解剖学教授 P. Wall と世界疼痛学会会長マギル大学心理学教授 R. Melzack の編集による Textbook of Pain が Churchill Livingstone により出版された。

1967年 Melzack と Wall によって gate control theory が発表され、痛みの生理現象の説明に大きな波紋をなげ、丁度中国の文化大革命のあとハリ麻酔が宣伝された頃でもあって、痛みの研究に大きなインパクトとなったことはわれわれの記憶に新しい。本書は 866 頁、痛みの基礎・臨床の広い領域にわたった 100 名の執筆者によって著されており、初めての痛みのテキストブックとして出版された壮挙ともいえるものである。

内容は基礎篇 18 章に始まる。組織傷害のときの末梢知覚神経の損傷と末梢神経由来のペプチドの変化から脊髄後角から上位中枢へと伝達される過程での変化や修飾が 6 章にわたって述べられる。内臓痛・中枢に起因する痛み 3 章がこれに続き、内因

性鎮痛物質とそのペインコントロールメカニズムが 2 章、痛みの測定を含めた心理面からみた痛みの 6 章などが含まれる。痛みの基礎的研究は最近その進歩がとみに加速され、極めて具体的なものとなった。痛みの臨床の基本的理解に必要なものが新しい角度から集約された形で述べられている。これらは臨床医家にとって必ずしも親しみ易く展開されているわけではない。しかし、痛みの理解に不可欠な数年前にはみられなかった内容の集積をみることができ

る。臨床篇は 5 部、27 章。A. 軟部組織と損傷 10 章。外傷、関節炎、リウマチ性関節炎、上肢痛、筋・筋膜症候群、脊痛、頭痛、火傷の痛み、会陰切開後痛など、B. 内臓痛 7 章、心臓痛、腹痛、女性性器の痛み、陣痛、筋痛、眼痛、顎部痛、C. 末梢神経と神経根損傷による痛み 5 章、D. 癌痛 3 章、骨・軟部組織の痛み、癌性痛の心理・社会面、死線期の癌痛、E. 中枢性疼痛 2 章に分かれ極めて詳細な臨床面からの診断・症候学が主体に述べられている。こ

の点、臨床家にとっては各専門分野での詳細な意見を汲み取ることができ都合が良い。

治療篇は 7 部 34 章からなる。A. 薬物 3 章、非麻薬系鎮痛薬、麻薬、精神賦活薬。B. 神経ブロック療法 3 章、C. 神経切断または破壊薬による遮断 10 章、D. 刺激療法 4 章、E. 理学療法 4 章には超音波、短波、マイクロウェーブ、マッサージ、運動療法なども含まれ、痛みの治療の多彩さを示している。また、F. 放射線療法に続いて、最後 G. に 9 章にわたっての心理療法が 90 頁にわたって述べられている。

臨床医学の分野で痛みを取り扱わないものは全くないといえる位に日常性の高い症候であるが、その実体の把握には著しい遅れがある感を免れない。痛みの基礎から臨床に及ぶ広範にして詳細な現時点での最前線を網羅してある本書は臨床医家に痛みを診断の手段として利用するのみでなく、そのもの自体治療すべき対象であることを教えている。そして実際の臨床的対応にも極めて有用な本が刊行されたものとして喜ばしい。

(21.50×27.50cm, 866pp, 1984,
¥27,600, Churchill Livingstone,
Edinburgh, 医学書院 洋書部 取扱
い)